

風に思う空の翼、輝く自由、Mastery for Service...

田 淵 結

最近関西学院大学総合教育研究室が公表した『関西学院大学卒業生調査報告書』(2007年3月)によると、1950年以後2005年までの5年毎の卒業生へのアンケートで、校歌『空の翼』を歌えるかという設問に対して「少し歌える」という回答も含めて90%が歌えると答えている。しかし気になるのは、2000年度卒業生の回答では「まったく歌えない」が21.6%、2005年では少し減って16.3%、その数字が大きくなっている。さて、このチャペル週報を手にしておられる皆さんはどうでしょう。

関西学院卒業生である山田耕筰のそのメロディーは、関西学院が上ヶ原に移転して大学を創設して新しい時代に向かって歩もうとする思いを響かせています。山田の友人であった北原白秋の歌詞も、「若きは力ぞ」と学生たちにあふれる生命力を歌い上げるのです。そしてその歌詞には、一見するだけではまったくキリスト教的な表現や用語も見られないようでありながらしっかりと聖書的なメッセージが刻み込まれ、キリスト教主義学園関西学院の歌となったのです。

「風に思う」の「風」という言葉は、旧約ヘブル語で言うと最初に人間が土の塵から創造されたとき、その主なる神がその鼻に吹き入れた「いのちの息」と同じ単語です。さらに新約聖書では、最初期のキリスト教が伝道を世界に向かって開始する原動力になった事件、ユダヤ教の祭りである五旬節の日に使徒たちの上に聖霊が降るという体験(キリスト教ではペンテコステという祝日として祝われ、今年は5月27日の日曜日でした)の中心となる「聖霊」とも同じ意味のギリシャ語なのです。人間が、自らのうちに風(神の息=聖霊)を感じるとき、その生きる目標をより鮮やかに意識し、その方向に力強く歩みだすことができる、そのための力としての神の働きを、「風」という言葉は持っているのです。

関学のキャンパスにたたずみながら、そこに吹く風を感じるとき、それはさわやかな季節感とともに、神の息、私たちを動かす力に触れることになります。そのときみなさんは、私たちの歩みを支える大きな力を同時に「思う」ことができることでしょう。

(文学部宗教主事、宗教総主事)